



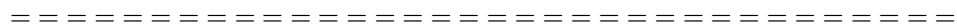
地域日本語支援ニュース こだま 第 296 号

2016.5.12



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる■

私の発見 実感あつての文化の差異

筑波大学大学院博士後期課程
曹 蓓蓓（そう ばいばい）

曹さんは上海出身。上海外国語大学日本語専攻を卒業し、日系企業勤務を経て、2010年11月来日しました。現在、筑波大学大学院で日本社会における多文化共生について研究しています。ボランティアとしても外国人集住地域で地域住民の通訳やコーディネーターをするなど、活動的な女性です。そんな曹さんに、日々の生活や活動のなかで発見したことを書いていただきました。

○体験してこそ理解できる

大学では、日本語だけでなく、日本文化も勉強していました。日本語表現上の曖昧さや日常生活の習慣の差は授業でも学んでいました。しかし、その時実感はなく物語のように聞いていました。例えば、お風呂の例です。日本人が銭湯でお風呂に入る前にシャワーを浴びます。しかも、シャワーしている時に皆座っているそうです。それを聞いていた私は面白い、座ったら楽だろうと思っていました。

生涯学習・社会教育学を専攻するために筑波大学（茨城県）に留学し、来日の二日目宿舎に入居、夕方、宿舎近くの公共浴室に行きました。座ったままでシャワーを浴びるという覚悟で行ったのですが、やはり驚きました。蛇口が低くて椅子も変な形で小さくて、ついに立ってしまいました。現在、来日し5年も経ったというのに、座ってシャワーすることには慣れていません。勿論、日本の入浴前のシャワーと私が知っている欧米系のシャワーにある文化や習慣の違いに気づいてきました。

そのことを契機に、私は異文化理解とは何なのかと考え始めました。異文化を経験して初めて驚きを発見し考えて、自分の体に融合することが異文化理解であると今私は思っています。

○ボランティア活動での驚きと感動

中国では一般的に、ボランティア活動は市民が行政の仕事を手伝うというイメージです。例えば、2010年上海万博で市民が行政を手伝って社会に貢献するような活動です。日本では全く異なるボランティア活動が展開されています。行政主導のボランティア活動の他に、市民が自主的に地域の為に活動をしています。私は研究の関係で、常に外国人集住地域に通って外国人住民と日本人住民の交流活動に参加しています。その中の一つはボランティアによる日本語教室です。

教室では、外国人住民に日本語の学習機会を提供するだけではなく、外国人が悩んでいる生活課題が解決できるようにサポートしています。さいたま市浦和駅東口の近くにある「にほんごのへや」午前保育付コース（さいたま市観光国際協会）という日本語教室では、日本語の学習のみならず、外国人の母親が学習できるようにその時間内に保育も行っています。こうしてボランティアが努力した結果、相互信頼の関係が構築されています。このような日常生活上のつながりがまさに、異文化理解をした後の多文化共生ではないかと思います。私の母国ではあまり見られないこのような場所は私にとって、異国日本での発見です。

勿論、ボランティア活動が盛んになっているのは、住民の力だけではなくて、行政側の理解と努力も欠かせないと思います。埼玉県川口市は外国人が集住している都市です。市内には17か所のボランティア日本語教室があります。これらの教室を支えているのはかわぐち市民パートナーズステーションです。また、

特に中国人が集住している芝園団地においては、日本人住民と外国人住民が交流し地域づくりに参加できるように、通信コミュニティをつくってスマートフォンを使用し、地域の情報を日本語と中国語で発信しています。他にも、芝園団地の防災訓練では、パートナーステーションが自治会と連携して、中国語の通訳もしています。このように行政と住民との連携が多文化共生の地域社会を構築するための大きな力になると、私は思っています。

以上のことが自分の研究を通して参加したボランティア活動から得たことです。この体験から自分の研究をより一層深めることができました。さらに、日本社会も一層分かるようになりました。全て私が発見し体験したことです。日本に留学・生活している私にとって、この体験は宝物です。
